

これはヴェネズエラにいるグラシア君の出しているルタ誌第10号からの訳で、三回位に連載の予定である。(三浦)

カインとアベル

ほぼ一世紀半にわたって共産主義者とアナキストは、電気のように極の持つ符号によって激しく引きあつたり反撥しあつたりしてきた。新聞で、集会で、演壇で、あるいは武器を手にバリケードの両側で、彼らは互いに探り、恐れ、罵り、けなし、攻撃しあつてきた。時には一方が囚人として、他方が獄卒、捕吏、処刑人として牢獄や収容所で。この小論はこうした紛れもない歴史的敵対に説明を与えようとして書かれたものである。

『時代を越えるアナキキー』の中でマックス・ネットラウは、一八四〇年前後にベルリンで持たれていたある集まりについて書いている。カール・マルクス、フリードリッヒ・エンゲルス、そしてマックス・スティルナーとしての方が通りのいいジュアン・カスパル・シュミットらもこの集まりの常連だった。この集まりは「ベルリ

ンの自由人たち」と呼ばれていた。ここではありとあらゆる事柄が議論された。難局にさしかかっていたヘーゲル哲学について、フォイエルバッハの主題の焦点に従ってキリスト教の起源について、ブルジョアジーに反対し、間もなくマルクスとエンゲルスの醜聞とともに国家に反対して。誰かが「国王に反対して」乾杯すれば、マックス・スティルナーはいつも「法に反対して」乾杯するのだった。やがてマルクスが「自由人たち」の会を不法法に打ち切った。マルクスは四年後にあの有名な宣言を書いた共産主義者同盟を設立しようとした時に、ブルードンともいがみあつた。大体このあたりから共産主義者とアナキストは絶え間なしに組んでほぐれつ争つてきたわけだ。個人的反目の問題だって？ それは迷宮に踏み込んだ審判者の安易な抜け道あるいは、修繕の利かない物の修繕を親切ごかしに買つて出た者の言い訳だったのだ。

ここに、学者が引用するには少々難解なために当節はとんど知られていない、ウージェニオ・スウの小説がある。スペイン語では「人民の息子たち」という題になっ

ていて、大昔の新石器時代に起こったブルターニュの一族の歴史である。始祖はカルナックのケルト族の族長だった。この一族は親から子へと一種の記録を伝えてきた。この伝記風の全体が一族の、というより古代ローマ以前に発してフランス革命に至る西欧文明の政治史をなしている。

時代の流れとともに一族は分裂していく。小部族としてローマ人の侵入者に対する闘いを開始した一族も、身内どうしで対立するようになる。円形劇場の剣闘士として、ゲルマン人の侵入の頃はライン川の反対側で、あるいは古典的価値の守護者として。彼らの姿は中世に入ると奴隸と主人になっている。ルネッサンス時代には血の繋りを断とうとする貴族とブルジョアジーである。さらに近代になると、私たちは同じ一族が僧服や軍服で、あるいはいかなる制服もないサンキュロットとして、議会に登院するのを見るのである。

共産主義者とアナキストは、カルナックのケルト族の族長ブレンの子孫が同一の発祥であると同じ程度に、同じ一族の出身である。「仲の悪い兄弟」の公式は、新しい専制の代表者たちに対し断固として自由のかがり火を守る者たちには、そのまま当てはまらない。ブルードンがマルクスに言っていたいくつかの言葉は、今日その予言

的価値をすべて回復しつつあると同時に、共産主義の教条的路線を、特にそれが人間性の侮蔑に平気な一身分あるいは一階級のイデオロギーと化して以来、歴然と証明している。地球に住む私たちはみな、「動物」を含めて平和の時も戦争の時も自分の叫び、やり方、秘儀、イデオロギー、宗教、支配者、部下、暴君、犠牲者をもつ「仲の悪い兄弟」なのだ。ただこういうあいまいな意味でのみ、共産主義者とアナキストは仲の悪い兄弟なのである。

## 神と国家

つい最近まで私たちは世俗と精神の権力の代表たちが歴史の揺籃から分かち持つてきた一種の集団権力というようなものに慣れていた。もっと前の時代には、これらの二つの権力が単一の権威者に併有されていて、それは軍事指導者だったり、魔術師だったり、司祭だったりもした。今日の東欧には、神と国家というこの大昔の公式の忠実な再現といった趣がある。

通常は、寺院と宮殿の主人たちがともに権力に参加するのだった。この公式は、ギリシャ・ローマ時代の異教がすべての神々を世俗化した時にやや色褪せてしまった。唯一神というユダヤ的公式は、今日で言うなら全体主義

的、ファッショ的、あるいは共產主義的である。人々が恐ろしい現象や自分の希望や夢に結びつけて自分なりに神を信じたことは確かだ。そこから多神教や偶像崇拜が生じた。古代の神聖帝国は世俗と魂の権力を皇帝という単一の権力に集中したものの、全能のエホバの髭を抜くなど私たちも知っている地方的な、特異なあるいは個人的な神に対する親しみを、(常に法よりも強い)習慣から根絶することはできなかった。ヘレニズムの影響はこの輪をくぐって誇り高いローマに達し、「救い主」のマゾヒスティックな受難を誇張する宗派が、すべての信徒のための唯一神に象徴される唯一の信仰にとらわれるようになる。いまだに神は嫉妬深く、不気嫌で、怒りっぽく、陳腐で、恐ろしい復讐をするユダヤの神だった。キリスト教の神聖な理念は、暗くて尊大で残忍な側面をもち始め、愛の女神(ヴィーナスと男根像)、収穫の女神(セレス)狩りの女神ダイアナ、そして豊かで見ずみずしい神話の世界に住み、大方が微笑んで、官能的で、酸素を呼吸し人間臭を発する男女の神々の群は、多神教の偶像崇拜者に引き渡される結果になった。

コンスタンティヌス帝は国として、神話の詩的世界をカトリシズムと呼ばれる禁欲的で陰惨で腐敗に無防備な一キリスト教のために隅に押し込めることに熱中した。

こうして、狂信的世俗人を皆から尊敬される殉教者にしたてなければならぬという厄介な問題は、音にきこえたあのキリスト教徒の群の牧者たちを国家協力の軛に繋いだ時に片付いた。似たような事はスペインでもゴート族の王レカレドがカトリックの教義に改宗した時に起きた。中世の教皇は一枚岩の世俗権の分散を利用して、それにとって代わろうと思いついた。巨大なローマ帝国が滅亡し、封建制と呼ばれる政治的伝播が西欧に完成すると、カトリック教会は数世紀にわたって(近代国家が初声をあげるまで)、自由市に分散した社会の接着剤の役割を演じた。教会は、一枚岩を保ち貴族階級から立ちのぼる土埃に対して強固に階級組織化されたこの時期に、今日なお大規模に維持されているあらゆる種類の権力を獲得した。

ルネッサンスは、この情眼を貪る歴史をも、また平民と集権化された権力に自分たちの封建的特権の限界を見ていた貴族とから日々議論されながら象徴的役割を演じていた新しい君主たちをも、震撼させた。

君主たちは街頭や天井敷敷でさえ廷臣たちを攻撃する莊園領主の横暴に対抗するために、人民の支持を必要としていた。そのための欲深い保護の下に生まれた自治体特権や地方特権を梃子として、この時から近代国家が具

体的な形を取り始めた。君主が兼職を与えて領主たちを宮廷に繋ぎとめ、国民的な勢力を持った時、王冠と司教冠の間に極めて漠然とした権力の境界をめぐって争いが生じた。教会は民族国家の中枢に深く参与してきた。地方や州の要求が信仰の保全に許すべからざる攻撃を含む場合は特にそうだった。レカレドの改宗には、おそらくゴード族の支配者たちの信仰告白である異端のアリウス派に対する、カトリックの策謀があったにちがいない。二つの権力は結局民衆の損失によって益された。すなわち教会は、精神支配の安泰のための懸案を片付け(世俗支配は付録で付いてくるだろう)、アリウスを捨ててペテロに帰依したゴード族の諸王は、司教冠を危険な敵に回すことを免れた。こうして回復された民族的統一は、代わってサラセン人が侵入して来るまで保たれた。

イベリア半島における純血の神聖帝国の衰退の理由の一つは、運命と領国を共有する聖壇と王座を等しく汚染した腐敗と、三日月旗の侵入者が襲来した時に平民が感じた解放感であるとされている。民衆はこの侵入者に肉体と精神に対する圧迫からの解放者を見ていた。

勃興する君主制民族主義と教会の提携は、フランス南部のアルビ派に対する二度の十字軍遠征からも読みとることが出来る。ここでも聖壇と王座の基本的な利害が一

致した。フランス王は単に象徴的に彼に帰属していた領土に対する拡張を開始していた。私たちにも周知の紛争によって新しい王家が誕生すると、王冠はほとんど骨董的な教皇の聖職授与によってそれらの王家を強固にしなければならなかった。聖職授与は封建制の難問にもかかわらず西欧の伝統の継続を保証した王冠の功績に対する高価な代償なのだった。世俗と精神の二重権力の確執は私たちが詳細にたづねるには退屈である。しかし、とにかく叙任権争いの攻防は共通の敵を前に棚上げとなった。

オクシタニア地方は、貴族たちの支配下にあったが、大雑把な共同体を現出していた。この共同体は古い文化とラテン語あるいはロマンス語そのものと対応していた。いまだ封建制がヨーロッパに残した痕跡が消えなかった。政治的宗教的理由による一連の大戦争の要因であるヨーロッパの民族主義は、非常に深い根をもっている。封建時代の城の廢墟の上に建てられたいくつもの王国や公国は見かけ上は封建制を終わらせたが、国境の壕や城壁や跳橋の背後の近代国家の一つ一つが、他の封建君主の城と隠然公然の戦争状態を続ける封建君主の城をつくっていた。

オクシタニアでは、国家に同化されることを肯じない古代キリスト教の多数な核のおそらく一つであるカタラ

派も根絶された。国家はヴァチカン帝国主義に対して絶望的な防戦を続けていた。ここでは国王と教皇が、一方は遠心的政治勢力を、他方は求心的信仰への不従順を退治するといふ共通の仕事で手を握ることにした。二つの至上権はその鉄と火を悪魔のような絶滅戦に用いたのである。

二つの伝統的な権力の協力は互譲を基礎にしていた。

叙任権争いは、もともとことんまでいっていったら、双方の破滅をもたらしただろう。だからこそ、両者は協力することにし、肉体と魂に対する権限を定めたのだ。そして双方の越権行為はせいぜい辛辣な議論までしか行かないのが普通である。

#### マルクス主義的宇宙進化論

『共産党宣言』の数ある版の一つの訳者であるJ・モリトルは、公開の論争におけるマルクスの怒りを、このひげ面の男に「自分の世界から遠く離れた所で展開されている書斎の分析」だと敢えて反論したかつての弟子によって説明している。モリトルは言う。「この言葉を聞くや、マルクスはランプが震えるほど机を叩いた。それからいきなり立ち上がった叫んだ。『無知が人のために役立ったことは未だかつてない。』そして異常に興奮し、

激昂して、部屋を大股で歩き始めた。』

シナイの神の怒りが、疑いもなく古えの指導者たちのように賢く、天才的だが高慢で、尊大で、羨望家で（他の光を嫉妬する）、復讐や陰謀やみじめな中傷を気にしないあの人物の、ふだんの行状には見られた。「ブチ・ブルの」「党派的」「反動的」「何の理論的認識もない」

「科学的基礎のない」「空想的社会主義」「サン・シモン流のたわけ」「間拔けて野心的で中味のない空論家」

「残飯」「役立たず」「半可通」、その他、彼を崇拜し彼の面前で水銀中毒症のように震えるほど卑屈になれない卑怯者と悪党に彼が投げつけた罵詈雑言は、彼の役僧や助祭や小坊主までが一字一句まねしたものだ。

彼の素行の一つで最も残念なことは、彼に震撼を与えた人物や物事の痕跡を消すことに熱心だったことで、それは単に消すだけにとどまらず、けなし、そしり、軽蔑し、時には剽窃しさえしているのである。

彼の宇宙の諸法則の一つは弁証法である。彼はそれをドイツの哲学者ヘーゲルから学んだが、そのヘーゲルを彼の悪の必然性の学説を取り込んだ末に反動的観念論者ときめつけた。哲学者である限りにおいてヘーゲルは反動的いや超反動的だったが、悪の不可逆的な必然性に関するヘーゲルの思想こそ（宗教的宿命論の経済分野への

導入だとロッカーは言っている）、マルクスが経済的・革命的宇宙に熱心に適用したものであり、そのことはすでに師に背いた弟子の最大の無恥なのである。実際、現世への適用を要求するには個人的に相当非妥協的で押しつけがましいからといって、ヘーゲルの観念論（時代とともにヒトラーの哲学者たちの間で一学派を成した）を、否定するのはともかく、それと張り合う必要はなかったのだ。ヘーゲルに帰せられるべき久遠の栄光がある

とすれば、それは多分彼の観念論で、だからマルクスはドイツのもう一人の大哲学者フョイエルバッハのおかげで唯物論を学んで以来、彼を攻撃し続けたのだ。そしてフョイエルバッハの場合も、師の影響を抹消するために、唯物論は自然現象にしか適用できないと抗弁した。そしてフョイエルバッハに受けた教えを隠すための最良の手段が、歴史とその政治的社会的帰結との唯物論的解釈を対抗させることだった。この理論の創始者の榮譽に服するよりも、彼は他の経済学者たちの痕跡を消すことに急

だった。ブルードンもその一人で、彼はすでに社会経済的諸現象は生命の物質的基礎を根とする花であると言っていた。彼がマルクスよりずっと開放的で、唯物主義者としては「より理想主義者」だったのは、おそらく、彼にあっては自由が彼独特の弁証法の一般共通の位置にな

く、人間的要求の歴史における何か具体的に基本的なものだったからである。

ブルードン（マルクスは彼にかつて噛みついたことがあった）の痕跡を消すために、彼の光彩で身の囲りを飾れなくなつてからは、「ブチ・ブル」「反動的観念論者」「形而上学者」というような軽蔑的あだ名で彼を抹殺した。マルクスと彼の追従者、それに彼を崇拜する若干のブルジョア批評家までが、いわゆるブルードン学説の矛盾を懸念になつてほじくり出した。それは結局道化役者の寄り集まりでしかなかった。なぜならブルードンの労作の明白な矛盾はまさしく彼の疑うべくもない才能に由来していたからである。ブルードンは思想の激流であり、その激流の中で水は湧き返り、渦を巻き、ただ進むばかりでなく、より勢いよく進むために後退もした。歴史上のすべての偉人が矛盾だらけなのだ。こちの独断主義者だけがこの弊を免れているのは、彼らにあっては真理は一度定着すれば二度と動かせなくなるからである。

マルクスはまたアダム・スミスやデイヴィッド・リカードのようなブルジョア経済学者やロバート・オウエンのような実用主義者が彼に与えた影響をも、尊大な侮蔑をこめて消し去った。「星の偽りは快い偽りだ。なぜなら誰も星まで昇って問いはしまいから」と言ったオウエ

ンは、抽象的労作の中で私たちがから見失われた者の一人である。

しかし、マルクスは自分に社会主義を教えた者たちに對してとりわけ激昂した。一八四三年にパリで、彼はどのグループにも加らずに、のちに輕蔑的に「空想的」と定義した社会主義者たち、カペー、ピエール・ルルー、ルイ・ブラン、ブルードンそしてミハイル・バクーニンその人と友誼を通じた。これらの人々の理論の断片によつて彼はその豊饒な「科学的社會主義」を築いたにもかかわらず、自分の渴きをいやしたその泉を埋めようとして彼らをけなすことにやっきになった。もちろん、人は既成の思想を信仰箇条として受け入れる義務はない。しかし、これらの人々の影響がマルクスの労作に表われていると私たちは考えるのだから、彼が彼らを認めず、同意できない師を侮辱するのを許すいわれは何もないし、頂上に立つ、シナイ山そのものになるという病的喜びのために彼らをがらくたの中に押し込んでしまわなくてはならなかったはずだ。

マルクスは共產主義者同盟を結成した時に素人気分を捨てた。これについても彼は創立者でなければならなかった。彼の同盟はマルクスとエンゲルスが少なからぬ右顧左眄の末に参加した既存の同盟をそっくり引き写した

ものだった。彼の同盟を飾った花、『共產黨宣言』も、その精神を吹き込んだのはもう一人の空想的社會主義者ヴィクトル・コンシデランの宣言だとする説を信用するなら、やはり原型ではなかったことになる。

同じように第一インターナショナルの生みの親もカール・マルクスとされてきたが、インターナショナルがすでに胎児期を過ぎた時にマルクスが加盟したということは巷間周知の事実である。

#### ブルードンの批判的視線

マルクスは闘争を選ぶことに決めた時、一八四六年五月五日にブルードンに手紙を書いた。この手紙は「わが親愛なるブルードン」で始まって、「君の崇拜者カール・マルクスの心からの友情を信じて下さい」で終わっていた。ドイツ、フランス、イギリスで起こっていた社會運動に關してこれらの國の社會主義者の間の情報交換を確立することが主題になっていた。彼はこう述べている。

「イギリスとの關係はすでに確立されている。フランスについてはあなた以上に良い通信員を見つけることはできないでしょう。イギリス人とドイツ人は自分の同國人以上に現在まであなたを尊敬してきたことを理解して下さい。」

回答として、ブルードンは、彼の参加が提案されている例の「通信委員會」の二重の性格と同様にマルクスをすでに知っているのと知らせた。ブルードンの回答はよく知られているが、ここにその最も示唆的な部分を敢えて再現するだけの価値はあるだろう。

「わが親愛なるマルクス君。あなたの通信員の一人になることには喜んで同意します。その目的と組織は非常に効果的であるにちがいないと思います。けれども、あなたに長い手紙を書くことも頻繁に書くことも約束できません。あらゆる種類の私の仕事、生來の怠慢と相まって、こういう通信の努力を私に許さないので。また、あなたの手紙の数行によつて示唆された若干の留保をあなたに付ける自由を得たいのです。さしあたり、組織と実践に關する私の考えは只今のところ、少なくとも原則に關しては完全に明快になっていますが、古い、あるいは疑わしい方式をなお若干の時間維持することは、一言で言うと私が公けに對してほとんど絶對的な經濟的反應主義を吹聴することは、義務であると、すべての社會主義者の義務であると思うのです。」

あなたが望むなら、社會の諸法則を、それらの法則が實現される仕方を、それらの法則を発見するに至る進歩を、いっしょに探ろうと思います。とはいうものの、す

べてのアプリオリな独斷論を粉碎したのだから、今度は私たちが民衆に教義を説こうとしないようにしようではありませんか。カトリック神学を打倒したあとで、すぐにプロテスタント神学の創始に破門と排斥の大打撃を加えたあなたの同國人マルチン・ルーテルのような矛盾に陥らないようにしようではありませんか。私はあらゆる意見に一日の長のあるあなたの思想を心から賞賛します。私たちは誠実な良い論争をしましょう。賢明で先驅的な寛容の模範を世界に示しましょう。けれども、私たちは一つの運動の先頭にいるのだから、新しい不寛容の先頭にならないようにしましょう。それが理論の宗教、理性の宗教であるにしても、新しい宗教の伝導者にはならないうちにしましょう。すべての抗議を受け入れ、奨励し、すべての排斥とすべての神秘主義を斷罪しましょう。一つの疑問もなくなったなどは決して考えますまい。そして最後の議論を戦わせたあと、必要なら改めて雄弁と反語をもつて再開しましょう。これらの条件つきでなら君たちの組織に喜んで参加しますが、でなければ、否です。」

マルクスのブルードンへの手紙の内容は、あまり十分な煽動にはならなかったらしい。彼をとび上がらせるための手段は手紙の追伸に求めなければならなかったよう

だ。ブルードンの友人グレー氏に対してマルクスは轟きわたるジュピターの怒りをぶちまけているのである。

「追伸。ここでバリのグレー氏をあなたに告発します。この男は文学的べてん師、一種の口巧者に過ぎません。彼は自分の無知を派手で気負った言葉使いで隠そうとしているが、自分のたわ言で笑い草になっているだけです。しかもこの男は危険です。持前の厚かましさに有名な作家たちと得た交際を悪用して、自分が土台になって彼らをドイツ人観衆の目の前で危険にさらそうとしています。フランスの社会主義者に関する著書の中で彼は敢えてブルードンの師（無給講師、ドイツの大学人の肩書き）を名乗ろうとし、ドイツ科学の重要な公理をあなたに啓示したように装い、あなたの著作を皮肉っています。この寄生虫にかり合わないで下さい。多分もっとあとでこの人物についても一度お話しするでしょう。」（『カール・マルクス全集』一八四八年初版によるJ・モリトルのフランス訳からの引用。D・リャゾフ『歴史的序論』を参照されたい。）

この衝突のち決裂は決定的となった。大体この頃からアナキストと共産主義者の敵対関係が始まったのである。この上なく厳しい呪いがブルードンと彼の労作の上にシナイの山頂から掛けられたのだ。

ここにブルードンの死に関する一八六五年一月二十四日付けのロンドンからのシュヴァイツァーあてのマルクスの手紙の抜萃がある。一八四四年のパリ滞在中に、私はブルードンの個人的知遇を得ました。ここでそのことに触れるのは、彼の「詭弁」（イギリス人が商売のこまかしをこう呼び習わしているような）の責任者が私だからです。私たちの長い論争において、それはしばしば夜を徹して続いたものでしたが、私は彼をヘーゲル哲学に感化させました。それは彼にとって非常な不幸でした。彼はドイツ語を知らなかったから、それを根本から学ぶことができなかったのです……」

学の根源を探ろうとはしませんでした。この運動こそ、おのずと解放の物質的条件をつくるものなのですが。」

つまりマルクスは自分がしようとした事をブルードンが実行することを禁じたのである。すなわち、その助けがあれば社会問題の解決法をアプリアオリにつくり出せるまやかしの科学の跡を追いかけていったのだ。ところで、一八四四年にブルードンは三十五才、マルクスは二十六才だった。前者はその頃知的成熟期の最中にあり、後者は、マルクスの言葉を使えば「生徒」に毛のはえたようなものだった。結局、論争の点に関しては、ブルードンはマルクスに暗示を与える人物でありえたわけだったからこの平凡なブチブチの痕跡を消し、さらにそれを全部否認して彼を利用する必要があったのだ。

だがマルクスは上述のシュヴァイツァーへの手紙にこう続けて書いている。「彼は経済学者からは不易の関係を必要とし、社会主義者からは彼らに貧困を貧困としてしか見させない（古い社会を終わらせるべきその建設的側面を見ないで）幻想を受け継いでいた。」

貧困の革命的側面が古い社会を終わらせることを私たちはまだ待っている。一方、現代の絶対主義の踏み台としての貧困の価値はファシストやナチやポルトガルの（他の専制の表象には触れなくとも）独裁制を通してすで

に見てきた事である。私たちはソ連邦をめぐって展開する全体主義体制に貧困の奇跡を（革命的奇跡を）待ち続けている。マルクスとブルードンと、いずれがユートピアを流浪っていたのだろうか？

マルクスはついに、「コミューン」の処刑人となり恐るべきパンフレット『フランスの社会戦争』を書かせるであろうティエールを礼賛するまでの無恥を極めた。彼のシュヴァイツァーへの手紙はティエールに言及してこう続けている。「彼の発言はそのうえ積極的な結果をもたらした。ブルードンの提案に反対するために行った演説で……ティエール氏はヨーロッパ全体に、フランス・ブルジョアジーの精神的柱に抛り所を与えているカテキズムがいかに哀れで幼稚であるかを暴露した。ティエール氏と比較すると、確かにブルードンはノアの洪水以前の巨人にも匹敵しうるだろう。」

平凡でつましい人間なら一八七一年にティエール氏がどうだったかを推量する義務はなかったのだ。だが新しい時代の予言者には多分それを推量することが許されたのだろう。

手紙はさらに続く。「ブルードンは弁証法への自然な傾向をもっていた。しかし、真の科学的弁証法（傍点は著者による）を決して理解しなかったのので、詭弁以上に

進むことはできなかった。」

弁証法を使えば、スペインのジブシーが「占い」と呼ぶものをどこの街角でも言い当てることができたわけだ。しかしながら、真の弁証法、科学的弁証法は、ティエール氏が腹で考えていることをマルクスに見抜かせることはできなかった。そしてブルードンの「詭弁」は（「君たちの同国人マルチン・ルーテルの矛盾に陥らないようにしようではありませんか……」などと言った時）、マルクスの中に新しい理論の、非寛容で独断的な新しい教会の創始者を見てとることを可能にした。この教会は現にこの世界の重要な部分を、ハンガリーやチェコスロヴァキアのように、異端者に対する呪い、破門、政治的粛清、暗殺、軍隊の遠征などの「手で」支配しているのである。

マルクスはシェヴァイツァーへの手紙を次のような不吉な冥福の祈りで終わらせた。—今私は、この男の庇護こんなに早く最高の審判者の役割を私に課したすべての責任を、あなたにとっていただきます。」

これが、自分の攻撃に死体が応酬できないことを知りながらマルクスがブルードンの死を祝した一部始終である。

（今村五月訳）

## 野 火

シリベルテール第5年目にふみこむ

この12月号は第五巻第一号だ。多大の犠牲を払って今まで協力して下さった皆様に、心からの感謝を捧げ、さらに変りなき御支持をお願い申し上げる。

×

信太君の御父君の永眠

信太君、ついに不孝の子だったね。僕たちも君のその複雑な気持を分け合って、御父君の前に合掌する。男一匹、まだしなければならぬことが君に残されている。元気な、あの明るい顔を、また見せてくれ

×

東京地区黒色救援会ニュース・〇〇日より

僕等の同志清水修一君への心からの連帯を叫ぶ同志が、ついに黒色救援会をつくった。小さな無力なグループかも知れない。だが大地に足をふみしめて立上る一人の魂を圧殺できるものはこの地上には存在しない。

ニュース一号（カンパ百円以上）申込先は次の通り、

東京都中野区中央四丁目31-19 和田荘、西塔気付

東京地区黒色救援会

×

## 無政府主義共学読書会について

大杉や難波らがぎやく殺されて50年たちました。権力者資本家はますます太り、人民は抑圧と窮乏を加えられ、社会は破滅しようとしております。

私は、人間解放を志向する初心の純真な人びとに、少いけれども全蔵書を、狭いけれども居室を提供し74年1月から毎月第二・四日曜日午後一時ごろから四時ごろまで共学読書会を開催いたします。

この会合が、人間相互愛と信頼と相互扶助による無権力の世界を作る人びとが生れる機縁に少しでもお役に立てばと老衰の微力をつくしたいのであります。

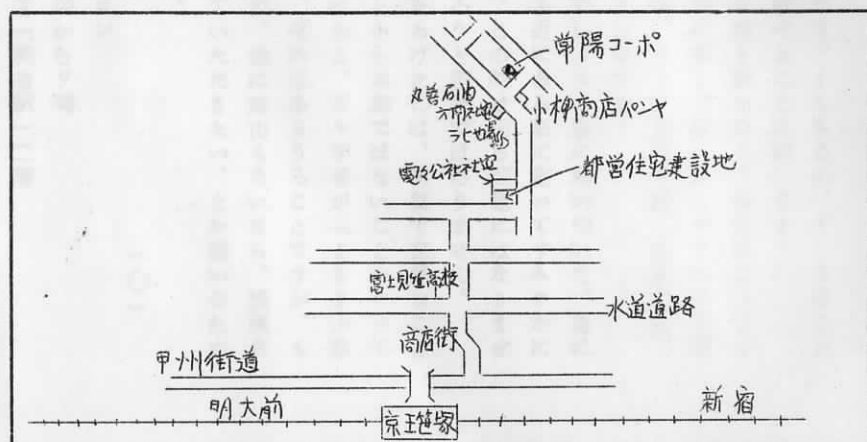
アナキスト革命の可能のためにみなさんのご助言とご助力を願います。この読書会への参加をおまちしております。

一九七三年十二月

黒色戦線社 大島英三郎

東京都杉並区方南町一の一四九の一五常陽コーポ二階六号室

電話 〇三ー三二二ー八七一七



リ  
一  
四

リペルテール投稿者諸氏に

ところで、ものを書くとはどういうことでしょう。"自分の意見を秩序だてて他人に知らせる"基本的にはこれにつきまします。

1. なるべく原稿用紙（字数のわかる紙）に
2. 読みやすい字で

伝えられる、このためです。もちろん、1・2のことがおこなわれなくても載せることは同じです。

こういうことはあるでしょう。急に思いついて、急に何かを知らせたいから手近にある紙に書いてすみやかに送るなり手わたす場合。この時は何ら問題にはなりません。どんな読みにくからうと苦勞ではありません。

△ リペルテール サロン